

勝連の史跡：

一の曲輪城門

現在では一の曲輪として知られる、城の最も高いところにあり最も重要な郭の門は、彩色された屋根付きの構造物が載った美しい石のアーチでした。この門は遠くからでも見ることができ、かつて詩歌にもうたわれました。この門までは、壮観で堅牢な石階段が続いています。階段と門開口部の下部のみが現存しています。発掘調査中、門の付近では、最盛期の勝連城の高い洗練を想像させる幾何学模様の石彫装飾が出土しました。

二の曲輪殿舎跡

かつて、二の曲輪には、威厳のある大きな木造の正殿（祭祀用殿舎）が城全体を見下ろしてそびえていました。建物自体は全く残っていませんが、建物の基壇から多くのことが分かります。建物は幅 17 メートル、奥行 14.5 メートルで、つくりは仏教寺院の殿舎に似ていました。床の下に、石で囲まれた長方形の変った構造が四つあり、これらは保管や隠れ場所に適した大きさではあるものの、用途はまだ分かっていません。多くの重要な建物の屋根でさ茅や木の板で葺かれていた時代に、この正殿には輸入された瓦で葺かれた美しい屋根がついていたことは、勝連の歴代城主の裕福さと海外との文化的な接触を証明しています。この建物をはじめとする勝連の木造の建物は、1458 年に阿麻和利が攻め滅ぼされ、城が落とされた際に焼失しました。

すり鉢状遺構

この不思議な円形の地下貯水池は、石で作られ粘土で裏打ちされており、直径は 7.5 メートルです。しかし、いつどのように建設されたのか、またどのように使用されたのかなど、多くの謎が残されたままです。城にはいくつかの良い井戸がありますが、この貯水池は飲料水の確保に使われていた可能性があります。城が攻撃を受けたときのための非常用水の供給源だったかもしれません。または、祭祀に使う特別な水を溜めていたと考えることも可能です。記録が残っていないので、その答えはおそらくこれからも分かることはないでしょう。

埋葬人骨

1985 年の発掘調査中に、三の曲輪の南東壁付近で、保存状態の良い 4 歳くらいの子どもの骨格が発見されました。いつ、なぜこの子どもがここに埋められたのかは謎のままです。悪運を追い払う儀式の一環だった可能性もありますが、そのような慣習は琉球では知られていません。この人骨についての記録その他の情報は残っていません。

三の曲輪城門

この屋根付きの堅牢な木の門は、石にある深い垂直なほぞに厚い木製の柱が四本が埋め込まれ、傾斜がつけられた石の壁にしっかりと組み込まれていました。この門は四脚門と呼ばれています。このように建てられた門は頑丈で、また高い地位を示すものでもあり、日本の寺や城にも見られます。四脚門とはいうものの、他の基礎石のほぞからは、この門には実際には全部で 6 本の柱があったことが分かります。

二の曲輪基壇

勝連城の他の曲輪が高い石垣と門で区切られているのとは異なり、二の曲輪と三の曲輪は、基壇の高さに二メートルの差があることで区別されています。二の曲輪とそのすぐ下にある三の曲輪の広場を区切るため、長方形の石灰岩ブロックを用いて 3 つの広い石の階段を備えた厚い支え壁が建造されました。長さ 4 メートルの壁はほぼ完全に真っ直ぐで、その背後に位置する基壇全体は盛り土で平らにならされました。この上に、大きな木造の正殿が建設されました。城のこの部分は、より前の時代の中国の建築様式をもとに巧みに設計された祭祀用の複合施設になっています。これより前に建てられた基壇の石積みの一部の遺構が発見されており、その遺構は正殿を含む曲輪全体が少なくとも 2 回建て直されたことを示しています。